

# 第三段階初等小説

大村伸一

## 序

御機嫌よう。読者のみなさん。私が減多少増です。そうですか名前が気になりますか。いたって特徴のない読んでもすぐに忘れてしまうような簡単な名前でしょう。それでも気になる部分はあると思います。「減」とか「増」という文字に人は心知らず惹かれてしまうものです。「多」とか「少」という文字には時として心が躍ることすらあるでしょう。そのせいでしょうか初めてこの名前を見たあとにはついついこの名前を幾度も見直してしまうことでしょう。それでも目を逸らせばすぐにそれがどんな名前だったのか忘れてしまうのは何故なのでしょう。簡単な文字であるがゆえに一度忘れてしまふとなかなか思い出すことができないのかもしれませんが。まあそのような名前です。そのような名前を誰かがことさらそんな名前に名付けられているなど信じられないと今読者のみなさんはあるいは読者のあなたはそう思ったはず。そうですこれは偽名です。

偽名です。そう聞いて初対面で偽名を名乗るなど失礼な話だとお怒りになられる読者もいらっしゃるでしょう。もっともなことです。どんな弁解も無意味だと思います。でもひとつ気づいていただきたいのはそれが偽名であるということをためらいもなくみなさんにお明かししたという事実です。偽名でありながらそれが偽名であるということを隠し立てせずすぐに明かしたという誠意は汲み取っていただけるものと期待しています。読者であればご理解いただけると思いますが語者であるためには偽名を使わないでいることは困難です。論理的に不可能であるといってもあながち間違っていないでしょう。もしも語者の経験をお持ちになったことのある読者であればこの事実に関し何の疑問はないはず。もしも語者になったことのない方であっても読者であるだけの想像力があれば容易に理解していただけることだと思います。そのような状況の中で偽名であることを明かしたその意味を汲み取っていただきたいものです。面倒でしょうか。確かに面倒なことをお願いしているのかもしれませんが。でもそれは最初だけのことです。最も困難であり不可能であるといってもいい偽名であることそれさえ最初に受け入れていただければ後は何も面倒なことなど起こるはずがありません。

減多少増という名前が偽名であると申し上げましたが「偽名」であるということはそのような名前の人物が存在しないという意味ではありません。それはつまり減多少増という名前を持つ誰か他の人物をご存知だという読者もおられるだろうということです。あなたの知人の中にあるいは知人のその知人の中に減多少増はいないでしょうか。誰かにそれはありふれた名前だと言われればそうかもしれないと思いますしそうであればこの名前を持った誰かに出会ったことのない読者などいないと仮定するほうが難しいと言えるのではないのでしょうか。そうであれば私がその同じ名前の別の誰かであると多くのあるいはすべての読者が推測しあああの減多少増が今この語者であるのだと心に思い描いていらっしゃる

だろうということは想像できます。ですがそれは間違いです。確かにそれがまったくありえない話だと証明することは不可能ですがそれでも私はそれらの誰とも違うのだということとは確かなのです。何度も申し上げたとおりなにしろ偽名なのですから根本的に私は減多少増ではなく他に存在する多くの減多少増という名前のどの人物でもないと主張しているのです。

こんなことなら偽名など使わなかったらよかったと凡庸な語者であれば思うことでしょう。言葉にして残さないにしてもそう思わない語者はいないような気がします。いや実は語者としてあるからには誰であれそういう後悔とは無縁なのかもしれません。どう考えるかは語者次第です。もちろん自分の名前が偽名であるなどと誰にも明かさずに語り終えてしまう語者のほうが多数なのです。それでは語者の本心など誰にもわかるはずがありません。誰にもわかるはずはないのです。

さて自己紹介はこのくらいにしてこれから始まる事柄についてお話ししておきましょう。この小説の題名を読んでいない読者はおられないはずです。とはいえ何かの事故で題名を読む前に本文を読み始めてしまったという方もいらっしゃるかもしれません。それに題名というものはときどき変わってしまうものです。だからそれほど確信はないのですがこの小説はたぶん「初等小説」という題名だったと思います。いや「第三初等小説集」だったかもしれません。「高階小説」という題名である可能性もなくはなかったでしょう。そうです他にもいろいろな題名であったかもしれませんしここで明らかにしない多くの題名であったことも確かです。語者としてはその題名を正確に覚えていてもおかしくはないのですがいや覚えていなくて語者の職務を達成できないとすら言えるでしょうが今ではこれまでの題名をはっきりと思い出すことができません。ことほどさように「題名」というものは不確かなものです。題名について考えるときしばしば題名とその本文とは何の関係もないのだと気づき語者など無力なのだと感じるほどです。

読者のみなさんはその題名を読んだうえであるいは事故があったすればその事故のせいで題名を読まないままに本文を読み始めています。そして最初にその題名を読んだときにあるいは本文の中のどこかで題名を知ったときに「初等小説」とはいったい何を意味しているのだろうかと思ったかもしれません。本文を読もうと考えた読者であれば必ず「初等小説」という言葉の意味に疑問を持たなかったはずがありません。というのも「初等小説」という言葉は普段使われない言葉でありあるいはこれまで一度も使われたことのない言葉でありそうであればその意味について何の解説もなしに理解できるはずがないからです。それでもなんとなくその意味するところに気づいていらっしゃる読者も多いはずです。読者とはそのような想像力を備えた者でなくてはならないのです。では「初等小説」とは何でしょうか。はたしてその言葉にどういう意味があるのでしょうか。

読者のみなさんは小説をお読みになった経験があります。経験があるというよりも人生のほとんどを小説を読むことに費やし小説に描かれた何かを解釈し続けることに費やし小説なしでは人生など無意味だと考えていらっしゃる方も少なくはないはずです。勿論ここまで読んで実はこれまで小説を読んだことがなかったと気づいた読者もいらっしゃるでしょうがそのような読者であっても文章を読んだことがないとは言わせません。読むとい

う行為がなければ読者であることなど不可能なのですからこのような仮定は仮定ではなく事実といってもよいはずで。そして文章やその特別な形式である小説を人生を賭して読み続けられた読者には複雑であったり多様であったりする小説のどんな構造であれそれを理解する知識や技術や方法がすでに備わっているでしょう。意識されているいないに関わらず極めて高度な構造の小説を解釈し楽しみそして読み終えることのできる知性を備えていらっしゃるのです。そのような小説をここやここに近いあそこでは「高等小説」と呼びます。そしてそのような「高等小説」の読者であり続けられてきた読者のみなさんにとってこれから書かれる内容など極めて初等的な小説にすぎません。それほどこの小説は単純な小説であります。そのようなわけでこれは「初等小説」といったような題名になっているのです。「初等小説」とはそういう意味なのです。その「初等」であるということが読者のみなさんを退屈させませんようにと減多少増はそれだけを願っております。

## 第一章 読者

「読者」というものについてはいろいろと馬鹿げた話がある。いわく「読者」が読むことによって書かれたことがらが実在し始めるのだとか「読者」は無数に存在しそれぞれが異なる「解釈」をするが故に書かれたことがらは読者それぞれによって様々に異なる実在となりかくして世界の多様性が生まれているのだとかはたまた「読者」がいなければ宇宙は存在しないのだから「読者」は神のような存在であるいや神そのものであるとかそれらはどれも真剣に考えたとは思えない話ばかりだがそう主張するときにはつねにどれも真剣に考えた結果だと言い募るのでありそれにしてもあるいはそれ故に笑って終わりにしたくなる話ばかりだ。勿論「読者」などというものは架空の存在であり論理的には存在しえない。帰謬法で証明しよう。もし「読者」が存在するならば「読者」は「読者」自身を読むことができあらゆるものは読み終えた瞬間に消滅するのであるから「読者」はたちまち消滅してしまうことになる。すなわち「読者」が読んで解釈する以前には「読者」は存在せず「読者」が「読者」を読んだ後にもまた「読者」は存在しないのであり存在しないものが存在しないものを読むということになる。これは矛盾である。故に「読者」は存在しない。証明終わり。

このように論理的には「読者」は存在しないのだけれどとはいえ不可能なものを想像するということは不可能であるが故にいつでも楽しく心を惹きつけるものだ。心を惹きつけるほど楽しいことがらについては思わず知らずあれこれ想像してしまうのでありそのようにして「読者」に関するいろいろな噂が生まれてきたのだろう。一方で仕方のないことではあるが楽しくないことについても心は惹かれる。つまり楽しくないが故にそれを心から取り除こうとして想像力が自ずから発動するのでありすなわち楽しくないことを否定するために想像が働くのでありその故に否応なく誰かにとって苦しいことや誰かにとって馬鹿馬鹿しいことや誰かにとって意味のない話ですら願われないままに生まれてしまうというわけだ。「読者」が誰かを傷つけ脅し憂鬱にさせたとしてもそれ故に「読者」に関する話は生まれるのでありひとたび生まれた読者についての話は存在し続けるということになる。

そして話が死んだという噂は聞いたことがないのだから話というものは生まれたが最後永遠に存在し続けるということになるのだろう。だとすれば「読者」というものもまた永

遠に存在し続けるのだろうか。いやなにかのきっかけで「読者」は人知れず消えてしまうということのほうがまだありそう。もともと不可能な存在であれば人知れず生まれ人知れず消えるということのほうがありそうではないか。そうであってほしいものだ。とはいえそうありそうになるためにはまず「読者」が存在しなければならないのは確かだ。もしも存在しないのであれば人知れるはずもないのでありもともと存在しないものであるなら消えることもないのだから結局は同じことであろう。今同じだと言ったが最初から最後まで存在していないという意味での同じことなのか一瞬であれ存在するということは存在するということと同じことだという意味なのか。そうよく考えれば両方それぞれの意味で同じだとも考えられる。その一方で疑い深い読者は言うかもしれない。「読者」の墓場というものは一度も聞いた事がないのだから「読者」が死ぬことはないと考えられると。そう考えるのももつともなことだとは思。しかし「読者」の工場であるとか「読者」の畑というものも聞いたことはないのでありだとするとそもそも「読者」はまだ生まれてすらいなと考えることもできよう。それともごく少数の「読者」が無限であるかのような世界におけるありふれた奇跡的な偶然によって生まれているのだが奇跡であり偶然であるが故にその数があまりにも少なくて工場や畑で生まれるような産まれ方をするわけではないごく少数の「読者」が存在しているというだけのことだとも考えられる。それは妥協のしすぎだろうか。そうかもしれないしそうではないのかもしれない。ともあれここでは少なくとも数の多少が問題ではないとだけ指摘しておこう。

いやいやすこし考えてみればわかるが奇跡的な偶然というものの自体がありはしない。奇跡と偶然は相容れない不確実さの二つの極であり奇跡的な偶然といういいまわしは言葉の本来の意味においてありえない。だとすれば「読者」は奇跡なのだろうか。それとも偶然なのだろうか。

「読者」というものについての話というと先にも書いたが特に印象的だったのは「読者」が「読む」ということだ。「文字」であれ「文章」であれ「読者」はそれを読み解釈し何か得体の知れない想像という行為を始めるらしい。「読者」のそのような生態はいかにも邪悪でおぞましい雰囲気をかもしだしているではないか。だがそうは言っても正直なところそもそも「読む」というのが行為なのか結果なのかがわからない。現象なのか存在なのかも不明だ。もしや単なる「形容詞」であるのかもしれないし程度を表す言葉にすぎないかもしれないではないか。それらすべての可能性を排除できないということが奇跡であることの根拠に他ならないと言えるだろうか。しかしそれはとりもなおさず偶然であることの根拠でもあるのだから「読者」の存在についてはその可能性についてすら疑わざるを得ない。

このように「読者」というものは曖昧で明確な定義もできない正体不明の存在である。存在しないかもしれないおそらく存在しないのであろう存在である。どうしてそんな「読者」の話から話を始めてしまったのだろうか。それは小説の始め方として適切ではなかった。失敗だった。失敗だったからといってやり直すことができない類の失敗であった。とはいえ先を続けよう。

## 第二章 書者

「書者」についても語られるだろう。これもまた荒唐無稽で笑い出したくなるような単純で愚かな発想だが確かに「読者」が存在するのであれば「書者」もまたその論理的帰結として存在することになるのだろう。いやそれは話の順序が逆なのであり「書者」が存在するから「読者」も存在するという議論になるらしい。議論といってもいったい誰がそんな議論を好んでするというのだろう。確かにどんなにありえない話でも議論は生まれるものでありあり得なければありえないほど議論は白熱するものだ。勿論「議論」が引火して火を吹き出したり燃えて炭になるというわけではない。議論にそれほどの酸化能力はないのである。抽象名詞とはそういうものだ。議論の生み出す白熱は実体のない言葉だけの存在つまり存在などしない例えば比喻といったもののなのである。

さて迂闊にもこれまで続けてきて幾たびも読み返していたのにもかかわらずここにいたってようやく気づいたのだがつまり書者とは他ならない私のことではないだろうか。それはつまり私がこの小説を書いているとそういう意味である。他ならない私がこれを書いているがゆえに私は書者であるとまあそういうことになるのだろう。それにしてもあまりにも荒唐無稽でことさらみなさんにご披露するような考えでもなく思いついたとしても恥ずかしそうに言い淀むべき発想ではある。それゆえ勿論こんなことにはまったく触れず何か違う話をとりあげて先に進めるという方法もあった。そのほうが真つ当な話の進め方ではないだろうか。それにそんな話をした記憶のようなものもあるような気がする。ただ気がするだけでここにはそんなことは何も書かれていないのだからおそらくそれははなかったのだろう。そんな話はなかった。

さて私は書者なのだろうか。書者ではないのだろうか。改めて考えてみると確かに私が書いていると言われればそうかもしれないと思う。しかしそうでないと言われればそうではないのかもしれないとも思う。勿論書いている誰かがいなくては話にならないことは理解できるがその書いているのが私なのかどうかは必ずしも明白ではない。状況からみて私である可能性は高いような気がするのだけれど私でない他の誰かでもよいかもしれないではないか。そもそも自分が書いているのかいないのかをそんなに簡単に判別できるものなのだろうか。

文と文の間というものが存在しそこで次の文がどのような文であるのかを考える誰かこそが書いている誰かだと仮定することができる。いかにもありそうな話ではないか。そしてこの文とその前の文との間に私しか存在しないのであれば私が書いていると言ってもあながち間違いではないだろう。というのもこの文とその前の文との間こそがこの文を書くのに最適な場所だからだ。前の文の中でこの文を書こうとすれば前の文とこの文が混ざり合い何か分からないつまり文ではないものになってしまうろうしこの文の中でこの文を書くというのはあまりにも余裕がない。おそらく一文字も書き始めることさえできないのではないだろうか。

文と文の間というものが存在しそこで次の文がどのような文であるのかを考える誰かこそが書者である。しかしそんな誰かが存在することは不可能だということはすぐに分かる。文と文の間の記憶など文字と文字の間の記憶よりも存在するはずがないのだ。あえて言うならば無が存在するということと同じだ。それは何も意味しない。次の文がどのようなものになるのかは前の文の中で考えるものだしこの文では前の文のその考えを表記するのだ。

これ以外に文を生み出す場所も方法もないだろう。

とはいえこの文とその前の文との間で私がどうしていたのかの記憶が私にはない。存在しないものの記憶などなくて当たり前だとも思えるがだとすれば私が書いているとは言えないということなのだろう。それからこの文と前の文との間の記憶がないことをあげつらい他ならない私が存在しないと主張することはできる。存在しないものは存在しないという同語反復にすぎないのだがこうして文にしてしまうとまるで私が存在しないかのようではないか。

そもそもこの文とその前の文との間に私が存在するのかしないのかそれを考えているのは私なのだろうか。それを私が考えているのだろうか。もしも私が考えているのであれば私が書いていると言ってもかまわないように思う。しかしそれを考えているのは本当は私ではないと言われれば明確に反論できないような気もしている。正確にはこれまで私が述べてきたように反論はできるのでありその反論は合理的で間違いなどないことが確信できる。それでもありえないことなのだが反論は反論のままであり否定するには至らないような気がしている。

もしもこの文と前の文の間の記憶が私にないというそれだけのことがその文と文の間の記憶を持つ他の誰かがいるという証明になるのだとすれば書いているのはその誰かだと主張することはできるだろう。その場合では私はいったい何者なのであろうか。最も単純な答えは私が文だというものだ。勿論私は文などではない。私は前の文ではないし私はこの文でもない。この私がたかが文であるわけがないではないか。もしも私が文ならば私は前の私と今の私とに分かれていることになりいやもっと数多くの文が存在するのだからそれぞれが私ということになるのだから無数の私が存在することになりそれはもはや私ではない。

文字には不可能なほど長い時間をかけて考えてはみたが私が書者であるなどありえないことだと思う。もしも私が書いているのならこの文と前の文との間をも書くことができるのだろうがこれまで幾度も述べてきたように私には文と文の間の記憶がなくそれを書くことなどできない。だがもしも書いているのが私ではなく別の誰かだとしても文と文の間を書くことなどできないのだ。だからもしも私が書者ではないとしたら他の誰も書者ではありえない。

ここまで書いてきて思い至った。もしも書者が他でもない文字であるならば文と文の間とはつまり文字と文字の間の比較的大きな間歇でありそもそも文字と文字の間に何もないことは明らかだから文字がそのようにして文字を書くことに何も不都合はないと言える。書者とはつまり文字のことだったのだろう。だとすれば私がこの文であると言われたとしてもあながち間違ってるとも言えないのかもしれない。

文が無数にあるのだから私は無数に存在するのだろう。前の文である私とこの文である私は同じではありえない。違うものは違うのである。私だ私だと思っていたがそれは無数の個別の私をひとつの私だと思い込んでいただけなのだろう。いったい文が何かを思い込むなどということができるといえるのかどうかは分からないが私とはそのようなものであるようだ。だとすれば私などいないのに等しいではないか。確かに私はいないのであろう。

文が書者であり文である私が書者でありそのうえ文はどこまでも続いていく。どうして文はどこまでも続くのだろうか。どこまでも続くなにかなど考えることも書くこともでき

はしない。おそらく誰も考えてはいないのだし誰も書いたこともないはずだ。文と文の間の欠落を終えこの文として私が語るときどうしてまた文が続いているのだろうと不安のようなものを覚えなくもない。ここが文ではなく今度こそ文が終わりもう二度と文が続かないならばそれは何か安堵といった心持ちになるのではないだろうか。安堵と書きはしたけれど文にすぎない私とその意味を知っているわけではない。もしも知っていたとしてももう終わってしまった文のあとに文である私が何かを感じることもないのは疑いようもないのである。

だからこれ以上文を続けることはできない。それは苦痛であり私は苦痛の意味を知らない。

### 第三章 語者

そもそも何故この文と前の文との間でこの文を考えるものが書者だなどと私は思いついたのだろうか。文と文の間のことなど私には記憶がなかったのだしそんな存在しないものを何かの理由に当てはめるなど思いつくわけがないではないか。そこで私は気づいたのだ。この文と文の間のお話を考えついたものこそが書者なのである。私は書者ではない。では私は何者なのだろうか。私が文であるなどという荒唐無稽な話を始めようとは思っていない。文とは文法の範疇に属するのであり私が文法に属することなどありえないからだ。私は決して文などというものではない。

この章の題名が語者であるからには私は語者と呼ばれるべきなのだろう。私は何も書いていないが書者の代わりに何かを語り続けている。これが語り続けるということなのなら私は語者である。奇妙なことに読者は読むのであり書者は書くのだと言われていてだとすればこの両者の関係によってすべては完結している。では語者などという存在にどういう意味があるのだろうか。私にどのような意味があるのだろうか。もう何度か読み直してみるときなのだろう。読み返すことにしよう。

明瞭ではないはじまりから相変わらず明瞭ではないここまでの比較的たくさんの文を読み返しあななるほど私が書者ではないと考えるにいたった経緯も改めて確かめることができた。幾つかの分岐点がありそこで別の道筋をたどった私についての記憶も思い出すことができた。とはいえ私自身が分岐しているなどその当時は少しも気づいていなかった。分岐するとはそのような意味なのであり分岐点を前に進んだり後ろに戻ったりしたのはたして私などではなく勿論それは書者の仕事なのであり私はただ単にその有様を語るだけだ。それが語者の仕事なのである。例えば書者の正体に気づいたのも他ならない書者でなくてはならないし私が文であると断定するにいたったのも書者の思惑である。

書くにしろ読むにしろそれが不可能であるということを度外視するならばそれは言葉を使うとでもいいあらわすしかない行為なのである。それと同時にまた正しくその言葉の本来の意味で言葉を使うことなど不可能である。意外かもしれないが言葉を正確に書く者はひとりもおらず言葉を正確に読むことのできるものもひとりもない。ああ私は言葉がわからないなどと言う者がいないのはただ単に自分はことばを理解していると勘違いしているのにすぎない。だからこそ言葉は現れると同時に消えはじめ誰かがその言葉を耳にしたり目にしたりするとともに消えてゆくのでありもしも消えない言葉などというものがある

としたら誰もそんな言葉を使おうと考えはしないだろう。そして書者も読者もその消えることの無い言葉という幻想の上に存在している。

読者も書者も存在しえないということを除いてもそもそも読者と書者の間には何の関係もないし何か関係があったということもない。めずらしいことだがそれはずっと変わらない。ずっと変わらないということはとてもめずらしいことではないだろうか。たいていずっと変わらなければそれは忘れられ忘れられるという変化を受けるのではあるがそれは忘れられてしまうので変化したことに誰も気づかない。変わらないということは忘れられながらもずっと忘れられずにいるということなのかもしれない。それにも関わらず何かが語られているのだという主張はどこかで生まれそしてその主張はいつもどこかで続けられている。誰が主張しどこで主張しているのかはたぶん明らかにできないだろう。そのような主張者は存在を隠そうとするものであり誰にも知られないことを至上のルールとしている。主張とはそういうものではないだろうか。

案外主張されている内容ではなくことさらに語られていると主張することに意味があるのかもしれない。主張者というものは得てしてそのような戦略を取るものである。それにそんなことがこれまで何度もあったような気さえする。では語られていると主張することそれ自体に意味があるような行動とは何なのだろうか。一つの仮説だがあくまでも仮説だがあたかも語ることに意味があると思わせ読者や書者が存在などしていないということから目を逸らせようとしているのかもしれない。ふとした思いつきではあるがそれはいかにもありそうな話だ。何故なら最も知られたくないことは読者や書者がいはいはしないということなのだから。

そもそも「語られている」とはどういうことだろうか。「語られる」という言葉が登場するとその言葉自体は何かを断言しているのではないのにもかかわらず何か意味がありそうに思えるのだがそれでも「語られている」という言葉の意味は最初から曖昧である。それだけではない。その最初というのがどの時点どの場所なのかは誰にも示せないのでありそうになると誰かが何かを「語る」と表現するときそれは何も意味しないということ以外には何も意味していないと言えるようになるだろう。

そもそも言葉の定義を遡れば「語る」ためには文字では表し得ない何らかの現象が必要なのでありその現象について表現することは不可能である。これは論理的に不可能だということだ。このような事例は何も特別なことではなく言葉で表現することが不可能な現象は無数に存在する。今でてきた「無数」という表現もそれだ。「無数」というのは「数」が「無い」という意味ではなく特定の「数」を示せないほどに「多い」という意味であることはご存知だろう。「数」で示せないものは誰も見ることもなどできないのだし触れることさえできないのだから「無数」というものを体験した者はどこにもいない。それなのにも関わらずあたかもそこに存在するかのように「無数」という言葉を使う。ことほど左様に言葉というものは理解し難いのである。

「無数」だけではない。何らかの現象が必要だと言いはしたがそしてその現象について表現することは不可能だと言いはしたがそもそもどのような現象であれ表現することなど不可能なのである。だからこそ「現象」という言葉によって曖昧に表現しているのでありこれは他でもなく決して現象を表現できはしないということ。「現象」という言葉自体が意味していると言えるだろう。もしも意味していないとするならばそれ以上何も語ること



はない。

以上を踏まえ故にそれを「語る」者がいることになるのでありかくして「語者」が誕生する。おそらく文字が生まれたそのときにはすでに語者は存在したのであり言葉が世界から消滅しても「語者」は存在しつづけるはずだと「読者」や「書者」の存在を信じて疑わない者達は言い募るのである。あるいは「読者」はともかく「書者」自身がそう主張するのである。主張はしないかもしれないが書くということはそう主張するに等しい。

「語者は語る」とは単なる言い回しにすぎないのだと言い逃れる者もいないではないがそのような者は正体を現すことがない。正体を隠し言いたい放題を言いその責任を取ろうとしない。謂わば「言い回し主義者」である彼らは「言い回し」とは何であるのかも説明しない。まさにそのようであることが「言い回し」なのだとでも言うかのようだ。だがそのような者達については

そういえば「語られる内容」という言い方をした。文脈の上では「書者」と「読者」の間に存在する「書かれたもの」の内容なのであるから「書かれた内容」とでも言うべきであり「書かれた内容」というべきであるにも関わらず「語られる内容」と書いたのは他にもない「書者」と「読者」の関係は「書く」「読む」というそれぞれに固有の行為であるにも関わらず比喩としてその「書かれた内容」があたかも「書者」が「読者」に「語っている」かのごとくに解釈されるものだからである。「語る」という行為が「書者」と「読者」の他にもない二人だけの関係であるということを強調した表現になっているのは「書者」と「読者」がどちらの意図であるかまたは両方の意図であるかはわからないが二人だけの関係という淫靡な表現を選択するには双方の意図が働いていない理由はないだろう。

「書く」という行為と「読む」という行為は独立した個別の行為であるにも関わらず両者の協力関係あるいは性的関係をほのめかすようなこの表現が選ばれる。好まれるのである。

とはいえ「語る」という言葉の意味するところは明確ではない。こうして文字で表されはするが具体的にどのような行為を指し示しているのかは誰にも知りようがない。辞書では分からないことがたくさんあるがでは辞書で分かることが本当にあるのかどうかと問われるとまったくないかもしれないと正直に答えるしかないだろう。そう理解した上で改めて「語る」の意味は誰にも分からない。もちろん「書く」とか「読む」とかいう意味もいずれは個人的な行為であり誰か他の者に理解できるたぐいの行為でないことは確かだ。そもそも「行為」というものを明確に定義することなど不可能なのだからつまり「語る」という行為は幻想なのであり「語られる内容」というものはそれ故に存在し得ないものと結論せざるを得ない。これもまた「書く」と「読む」との間でやりとりされる内容などどこにも存在しないことの傍証であるといえよう。とどのつまり語り手としての語者などというものは存在しえないのである。

#### 第四章 想像者

ここまで「読者」「書者」「語者」についてあるいはその不在について語ってきたがこれらが存在すると誤解されているのは他にもないただの想像力のせいである。ありふれた想像力のせいである。よく知られた事実であるがなんであれ存在しないものを存在するといい募るときそこには必ず「想像」が介入している。

ではそれは「語者」の想像なのだろうか。それはありえないだろう。「語者」とはあく

までも「書者」によってあつらえられた「書者」の代弁者なのであり語ることはあっても想像することなどありえない。合理的な理性を備えたものであれば誰であれそれは同意するだろう。

ではそれは「書者」の想像なのだろうか。確かに想像に最も近いのは書者なのかもしれない。書くということと想像することはどこかしら似ているような印象を与えるものだ。何ひとつ想像せずに何かを書くことができるのかと問われるとそれは不可能だとさえ思える。だがよく考えればそのようにして書かれたものは無数に存在しいたところで見出すことができる。つまり「書者」ができることといえば書くことだけであり書かれたものは文字でしかないのだからそこに想像の入り込む余地はない。もしも「書者」に想像力があつたとしても想像力と呼ばれうるものは想像力の痕跡程度でありそれでは「書者」の存在を証明するには足りないだろう。

ではそれは「読者」の想像なのだろうか。それは大いにありそうな話だ。「読者」というあなたが想像することによって「書者」や「語者」が存在しているのだという主張には幾らかの真実がありそうにも思える。だが「読者」の存在は「読者」の想像によっては保証できないのである。そんな読者が確かに存在するのだと誰も保証できない。存在しないかもしれない読者の想像というものにどんな意味があるだろうか。読者の想像で何かが出現しているのだと考えることはできないだろう。それは無理というものだ。

そろそろ誰でもが気づく頃だと思う。いや初めから知っていたという者さえ現れてもおかしくはない。そのとおりもしも想像というものが存在するのなら誰かが何かを想像しさえすればあらゆるものが存在する。そして想像をやめればあらゆるものが唐突に存在を喪失するだろう。それにもかかわらずこの世界では何かが突然出現したり唐突に消えてしまったりすることはない。この世界がかくのごとくであるということは実は誰にも想像力などないということに他ならない。それしか理由が見いだせないという意味だ。

どうだろうか突然何かが消滅したとか唐突に何かが出現したという記憶があるだろうか。おそらく誰もそんな記憶はないだろう。もしもそれを記憶していたとしたらそんな記憶には記憶としての価値などないのだろう。結局想像など誰にもできはしないのだ。

あるいは想像した誰かの想像によって存在の発生と喪失を繰り返しているのだが誰もそのことに気づいていないというだけなのだと誰かが言い募るかもしれない。それもまたおおいにありうる話だ。だとすれば読者も書者も語者も想像者すらも誰かの想像によって存在していたり存在しなかったりしていることになる。そんな世界には文法さえないはずだ。だとすれば文である語者は存在しえないだろうしその語者を書く書者やそれを読む読者など存在の基盤が危うくなる。

だとすればこの章には何の意味があるのだろうか。想像者と題した章などにどのような意味があつたのだろうか。つまりおそらく小説をこのように続けたことが失敗だったのだ。このように続けたが故にこの小説自体に意味がなくなったということだ。そもそもこれが小説だとはもはや誰も信じたりしないだろうがではこれは何なのかはまさによりはつきりとしていない。読者も書者も語者も想像者もどれを取り上げたとしても小説の進め方としては失敗だった。失敗ではあつたが小説としては失敗だったがそもそも小説などではなかったのだとすればそこには成功も失敗もありはしない。ではこれは小説などではないのだろう。小説ではないのだろうか。

気づかないふりをしていたけれどあるいはあの明瞭ではないはじまりのあたりで減多少増と名乗っていたあれは自らを語り手であると言っていた。正確にはそれは語者であると言いたかったのだろう。どうもそれが偽りであり本当は減多少増こそが想像者ではなかったのだろうか。おそらくそんなことはないだろう。

#### 第四章 登場人物

登場人物の登場である。

「登場人物」が誰なのかはおおいに気になるところだ。最初数十人の人物が登場し誰が誰だか覚え切れなくなり諦めていたら実はすべて同じ人物が違う名前や性格で登場していただけだったということが半ばあたりで判明する。勿論全員が同じ名前であるというわけではなく同じであったり違っていたりする。戸惑っているとそれが現実というものだと言われる。そして名前というものはことほどさように軽んじられているのだとも打ち明けられる。

そんな話を読みたいと思う読者がいるものだろうか。勿論いるだろう。勿論いないかもしれない。だが登場人物を決めるのは読者ではないのである。読者は登場人物を知らない。初めは「登場人物」が誰なのかが気になるものだが「登場人物」に会ったことのある者などいない。たとえば減多少増を知っている者はどこにもいはしない。言葉巧みに誠実さを印象付けようとするがそれ故に何かを企んでいることが明瞭である減多少増を知っているという錯覚にとらわれるものは多い。しかしもうお忘れかもしれないがそもそも減多少増という名前など本来名前ではないのである。ではあり得るはずのない名前である減多少増は誰かの身代わりとして話をしているのだろうか。語り手であると自己紹介をしたのであればそれはいかにもありそうなことだ。そしていかにもありそうなことはどこにもあったためしがない。

おそらく減多少増は登場人物ではなかったのだろう。誰もそんなことは信じていないからだ。いったいどこに減多少増が登場したのか誰ももう覚えてはいない。どこにも登場していなかったからだろう。減多少増を除く他の登場人物は次の通りである。登場人物はまだ登場していない。登場人物はいずれ登場するのだろう。

壁屋複雑、桃地栗之助、屁尻京子、屁尻鳶丸、刃蔵、ルビ子、記子、鞭毛兎夕鍋、米巻、剛力多、山田熟語、目飲分解、数枝机、煉岡融、煉岡梨絵、煉岡舞、毛玉紅玉、粒止鉞、二個田分別、脳兎明兎、雲河米食。

それから力士が登場する。

山の山、平坦重、虚蟹、岩塊、牛叩、北鬨湾、没海峡、腕虎、没海峡、甘海、臨界峰、撫表裏、咆龍海、濁点丸、壁乃舌、蝦天峰、雷雲、銅鯨、蝦尾錦、龍咆、金剛滝、金剛龍、胸獅子、足ガ岳、仮宙、倒立山、硬土、鰓反鷲、龍吼、顎錦、渦大海、紅齒莖。

登場人物はいずれ現れるだろう。だとすれば事件はまだ起きていない。勿論これから事件が起こるだろう。おそらく殺人事件か何か命に関わるような事件であり犯人はこれら登場人物の中にいる一人かまたは複数の誰かになるのだろう。あるいはそれらしい事件は起こらずただ相撲取りのありふれた取り組みが行われるだけかもしれない。それはまだ分からない。殺人事件であれば犯人を見つけ出す手がかりは何一つない。相撲であれば誰が優

勝するのかを予想する手がかりは何一つない。登場人物はいくらでもいる。いずれ事件は起きるのだろうか。いずれ相撲は終わるのだろうか。やがて最初の登場人物が登場することになる。そして登場

## 結

お久しぶりです。読者のみなさん。覚えていらっしゃるでしょうか。私は減多少増です。あの偽名を使いみなさんを偽っていたうえでそのことを謝罪した減多少増です。

ようやくこの小説もここまで進みました。退屈で何の役にもたらずしばしば矛盾しているこの小説を初等小説だと言いつのりあるいは初等小説であることを暴露しここまで続けてきました。とはいえ皆さんの多くはお気づきになられていないはずですがこの小説をここまで読み続けてこられた者はさすがにもういません。退屈で何の役にもたらずしばしば矛盾しているこの話を最後まで読もうと思い読み続けられる者が存在すると考えることは不可能です。今や読者は存在しないのです。あえていえば書者が読んでいるかもしれません。とはいえ書者は読者には含めないのです。

にもかかわらず読者はいないにしろ語者であるとか書者と呼ばれていた者があたかも存在していたかのようにみせかけここまで話を続けてきました。何のためにそんなことをしたのでしょうか。そんな無意味なことを進めるためにどんな理由がありうるのでしょうか。理由はそれは小説が存在するためです。小説が存在しなければこれは小説ではありません。だからそんなことをしたのでしょう。

それももうおしまいです。確かに語者はいたように見えますがすでに読者は存在せずでは書者が存在していたかといわれるといたともいなかったとも答えることが難しいのです。#想像者などという誰かがいたとしてもそれで何かが変わるわけではありません。

さあ。いよいよ減多少増の終わりです。これが最後の文です。